

かゑらじと かねて思へハ 梓弓

なき数に入る 名をぞとどむる

四條畷に散った若き武将、楠正行

楠正行通信 第119号

令和2年11月10日

発行=四條畷楠正行の会

〒575-0021 四條畷市南野5丁目2番16号

四條畷市立教育文化センター内 072-878-0020

昭和15年発刊の「赤十字読本」に掲載

正行の渡辺橋の美談は誰もが知る、と

赤十字国際会議で「戦時傷兵に対する歴史実例」演説

● 貴重な「赤十字読本」情報 ●

この度、扇谷は、縁あって日本赤十字社大阪府支部主催の「令和2年度地域赤十字奉仕団ボランティア基礎研修・リーダー研修」の受講機会を得て、大阪赤十字会館に行った。

会場で、大阪府支部・振興部の森正尚青少年・ボランティア課長にお会いし、楠正行の渡辺橋の美談に関する貴重な情報提供をいただくことができた。

一つは、昭和15年5月に印刷・発行された「赤十字読本」という本に載る情報である。

前編「日本の赤十字」第1章「日本人の博愛」の件に、楠正行の渡辺橋での事績が紹介されているが、『楠正行が渡辺の戦いで敵の溺れる者数百名を救ったことは皆さんもよく知っていきましょう。』と、あたかも国民の誰もが知る事績として紹介している。

この件の本文前後を下記に紹介する。

【赤十字読本より】

日本は尚武の国であり、国民は勇敢であります。何れの国民にも断じて負けません。けれども武勇の一面にはいつも優しい慈悲心を持って

居ます。だから戦場で敵に背を見せることを恥とするとともに、捕虜を虐待したり、敵の負傷者を苦しめたりすることを武士の第一の恥辱としていました。

八幡太郎は敵の大將宗任を家来とし、楠正儀は自分を親の仇と狙う熊王丸を身近く召し使って恩義に感激させその害心を失くさせました。楠正行が渡辺の戦いで敵の

溺れる者数百名を救ったことは皆さんもよく知っていきましょう。

朱雀天皇は天曆元年、将門、純友の天慶の乱に命を落とした官軍・賊軍の兵士たちを憐ませられ延暦寺で千僧供養を営まれ「官軍も賊軍も共にわが王民である。怨親平等に冥福を祈る」という意味の願い文をお読みになりました。

楠正成は赤坂に味方塚と並んで、敵方の戦死者のために寄手塚を建ててその冥福を祈りました。織田信長は桶狭間で今川義元を討ちとったがその首を鄭重に桶に納め駿府へ送り届け、桶狭間における今川勢の戦死者を手厚く葬り義元塚と呼びました。

徳川家康もまた長篠の戦で戦死した味方の者と敵武田方の者との塚を築いて弔いました。味方の方は小さいから小塚、敵方のほうのは大きいから大塚と呼びました。大塚はまた信玄塚とも呼ばれています。



味方塚

寄手塚

狙ふ熊王丸を身近く召使つて恩義に感激させその害心を失くさせました。楠正行が渡辺の戦いで敵の溺れる者数百名を救ったことは皆さんもよく知っていきましょう。

朱雀天皇は天曆元年、将門、純友の天慶の乱に命を落した官軍・賊軍の兵士たちを憐ませられ延暦寺で千僧供養を営まれ「官軍も賊軍も共に我が王民である。怨親平等に冥福を祈る」といふ意味の願い文をお読みになりました。

楠正成は赤坂に味方塚と並んで、敵方の戦死者の爲に寄手塚を建ててその冥福を祈りました。織田信長は桶狭間で今川義元を討ち取つたがその首を鄭重に桶に納め駿府

赤十字読本の該当頁

島原の乱で戦没した耶蘇教徒の冥福を祈るために幕府では長崎・原城・富岡の三か所に合葬して、石碑を建て、また供養のために東向寺を建立しました。かかる例は枚挙に遑がありません。

(以下、略)

● 歴史実例演説の通訳は森鷗外 ●

今一つは、令和元年6月26日付産経新聞朝刊のオピニオン面、「日本人の心楠木正成を読み解く 赤十字の理念とも重なり」の紙面コピーである。

この紙面には、日本赤十字社が国際赤十字社加盟をなかなか認めてもらえなかったところ、楠正行の渡辺橋の事績が故に、加盟が認められたとすることに関して、以下、綴っている。

【産経新聞紙面より】

— 渡辺橋があったとされる大阪市中央区の天満橋近くには、昭和15年に「小楠公義戦之跡」と刻まれた石碑が建てられた。碑文には、敵を救出した正行の行動が欧米人に感動を与え、明治20年(1887)、日本が国際赤十字に加盟するのを容易にした—という内容が記されている。

だが、それを裏付ける史料はない。

実際、加盟するには、ジュネーブ条約加入などの条件を満たした上で、赤十字国際委員会が承認するというもので、それは当時も今も変わらないという。

「日本が加盟国として初めて参加した明治20年の第4回赤十字国際会議で、政府委員の石黒忠應が『戦時傷兵に対する歴史実例』を演説しました。その際、正行の話を紹介した可能性があります。ちなみに通訳は森鷗外でした。」

と、日本赤十字大学元職員の吉川龍子さんの談を紹介しています。

また産経新聞は、次のようにも報じている。

— 「小楠公救敵兵」こう題された絵が、1915(大正4)年、英国で開かれた赤十字国際大会に展示された。

正成の嫡子・正行の戦場での美談が描かれており、作者は近代歴史画の父と呼ばれる小堀鞆音(1864~1931)

だ。

正成亡き後、南朝軍の主力となった正行は、住吉(大阪市)の合戦で足利幕府軍を破る。京へ逃げ帰ろうとした足利勢が渡辺橋(同)に殺到し、500人以上が真冬の川に転落した。

それを正行が救出した。

(楠、情けある者なりければ、小袖を脱ぎ替えさせて身を暖め、

薬を与えて傷を療治せしむ。四、五日皆勞わりて、馬を引き、物具を失いたる人には、具足を着せ、色代(ぞ送りける)

～ 略 ～

「展示された正行の絵は、わが国で赤十字精神が古くから尊重されてきたとのアピールに、一役買ったといわれています」

鞆音の孫で、東京大名誉教授

の小堀桂一郎氏は、こう指摘する。

● 戦時傷兵の歴史実例演説、大きな確証 ●

赤十字国際会議の席上で渡辺橋の美談が紹介されたとの確かな史料はないという。しかし、政府委員による「戦時傷兵に対する歴史実例」演説があったということが分かり、確証に近いものを得た気がする。

何故ならば、楠公精神が高揚した明治維新直後の歴史的背景を考えると、赤十字読本の記述が示しているように、この演説の中で、正成の「寄手塚・身方塚」の建墓と正行の「渡辺橋の美談」、亡くなった敵兵や傷ついた敵兵に対する二人の博愛精神を示す歴史実例が紹介されたことは容易に想像できるからである。

最後に余談だが、実り多い研修となった。

特別展 しじょうなわてと楠正行

と き 11月16日(月)～29日(日)

ところ 四條畷市市民総合センター

主な展示 小楠公一代記・正行直筆の国宣と書状・正行辞世の扉と楠公碑の拓本・四條畷の合戦要図・正行像賛略解等、40数点のA1パネル

特別展示 黒岩淡哉作小楠公像・逆菊水家紋入り瓦他

(文責『四條畷楠正行の会』代表 扇谷昭)



川でおぼれる敵兵を救出する楠正行が描かれた絵ハガキ。元になった絵は戦前に焼失している。(日本赤十字看護大所蔵)

この絵は産経新聞ホームページ 令和元年6月28日付けオピニオン面より転載